

「教会の祈り」—使徒行伝講解説教 11—

詩篇  
使徒行伝

第2篇 1～3節  
第4章 23節～31節

説教 本庄侑子牧師

ペテロとヨハネは釈放されるとすぐに仲間のところに帰って、言われたことを全部報告しました。それを聞いた一同は神に祈りました。彼らには帰るべき仲間がいました。困難を分かち合い、共に祈る教会がいたのです。様々な困難にあう時、私たちは一人で経験しているのではありません。直面する困難は確かにバラバラです。神がペテロとヨハネを通して足の不自由な男と出会われたように、神はあなたを選んで特定の人々と関わらせませす。しかしそれは、教会の出来事として覚えられている。

礼拝の中の代祷は、過ぐる一週間、教会や兄弟姉妹、世界に起きた出来事を覚えて教会を代表して祈る祈りです。また、礼拝の中の報告も教会の出来事を分かち合い、共に祈るためになされます。週報はただの予定表ではなく、大阪教会の使徒行伝です。神が大阪教会を通して何をしてくださったか、何をしてくださるかを証しています。日曜日ごとに教会に帰り、それぞれの報告を受け、共に祈り、また教会から遣わされていく。それがキリスト者の歩みです。

ペテロとヨハネから報告を受けた一同は祈りました。その祈りはヒゼキヤ王の祈りと似ていると言われます。かつてヒゼキヤ王も脅迫されました。あなたは欺かれているのではないか。他の国々が滅ぼされたことを知っているだろう。彼らの神々は彼らを救わなかったのではないか。

このような脅迫は私たちの周りにも満ちています。毎週礼拝に行っているけれど、いつまでたってもあなたのその問題は解決しないではないか。あなたの神はあなたを見捨てるだけではないのか。世界を見渡したらどうだ。もっと人生を確かにしてくれるものがあるではないか。

そんな時、ヒゼキヤ王は脅迫状を広げて主の前に祈りました。それこそが教会らしい姿だからです。最初の教会がしたことも同じでした。彼らはすぐさま、神に呼びかけます。「天と地と海と、その中のすべてのものとの造りぬしなる主よ。」(24節)当時、「海」は恐ろしいものの象徴でした。自分たちがコントロールできない力を象徴していました。彼らは祈りました。天と地も、この海もあなたの被造物。この脅迫の力も、あなたの力が及ばないものではありません！

祈り始めると、彼らが抱える困難も、神の前では小さいものであることが見えてきたのでしよう。彼らは御言葉を思い起こさせられ、最も重大な事実が目が開かれていきました。あのキリストの死でさえも、神の御手の外にあったのではなく、御心によって実現した。しかも、その先に復活が用意されていた。この困難も神の御手の外にあるのではない。キリストの死と復活において救いを実現して下さった神が、終わりの日までに成そうとしておられることがある。私たちは今もその中にいる。神はこの困難の先にも、何かを用意しておられる。

彼らが最終的に祈り求めたのは、困難が取り除かれることではありませんでした。困難の中でも、思い切って、大胆に、なすべきことを行わせてくださいということでした。教会が御言葉を語り続けること。遣わされている場所で、困難の中でこそ、他の何によるのでもなく御言葉に支えられ、生かされ続けること。そんな私たちを通して、キリストが誰かと出会い、御手を伸ばして救いへと導いてくださることで

困難に囲まれても、教会にいる限り、私たちは最終的にこのような祈りに導かれるのでしよう。私の人生が平穩無事でありますように、という祈りではありません。神が、この困難の中にあって私を強め、大胆にし、この私を通して世界に御手を伸ばしてくださるように。苦しみの中にある人に、私に敵対する人々にも御手を伸ばしてくださるように。

神は祈りに応えられました。「彼らが祈り終わると、その集まっていた場所が揺れ動き、一同は聖霊に満たされて、大胆に神の言を語り出した。」(31節)場所が揺れ動くのは、神が共におられることのしるしです。神からの祈りの応えは、困難を取り除くことではなく、聖霊の満たしと、私とあなたと共にいるから安心して行きなさい、という約束でした。

祈り終わった時、神は力強く働き始めました。困難は彼らを困ったままです。しかし御業は既に始まった。彼らの内に始まった。そしてその先で、彼らを通して御業があらわされ、救いの御手が伸べられていくことになるのです。

(記 本庄侑子)